《　伊万里・西松浦支部　》

支部長　笹山　清彦（啓成中）

１　研究主題（研究テーマ）

『　社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして　』

～ラーニング・パートナー（LP）との関わりを通して～

２　主題設定の理由

本支部では、令和元年より『社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして』を目標に、研究実践をしてきた。「社会に開かれた中学校社会科の学び」とは、生徒が主権者や一市民として、主体的に現代社会の様々な問題や課題から最適解や納得解を見出していきながら、これからの社会を創り出していこうとする意欲の高揚と必要な資質・能力の育成を目指したものである。これまでの実践では、単元での学びと関わりがある社会問題を題材に取り入れたパフォーマンス課題を設定し、社会問題の解決に向けて情報の把握、考察、解決策の提案などの学習活動に取り組んできた。特に、生徒と同じ課題解決に取り組む協働的な学習者をラーニング・パートナーとして取り入れ、情報を提供したり、議論に参加したりすることで、学習の質を高め、より現実的に社会問題や課題の解決に取り組ませることで資質・能力の育成につながったと考える。一方で、取り扱う社会問題が一市民として解決できるレベルでなかったり、現存の資質・能力では解決が困難なものだったりしたために、ねらいに十分迫ることができなかった。そこで、生徒にとって身近で、解決の必要性や解決しなければならない切実感がある社会問題を学習課題にすることで、ねらいに迫ることができるのではないかと考えた。

３　研究の内容

(1)「切実感」のある社会問題を学習課題とするために

・パフォーマンス課題の設定について

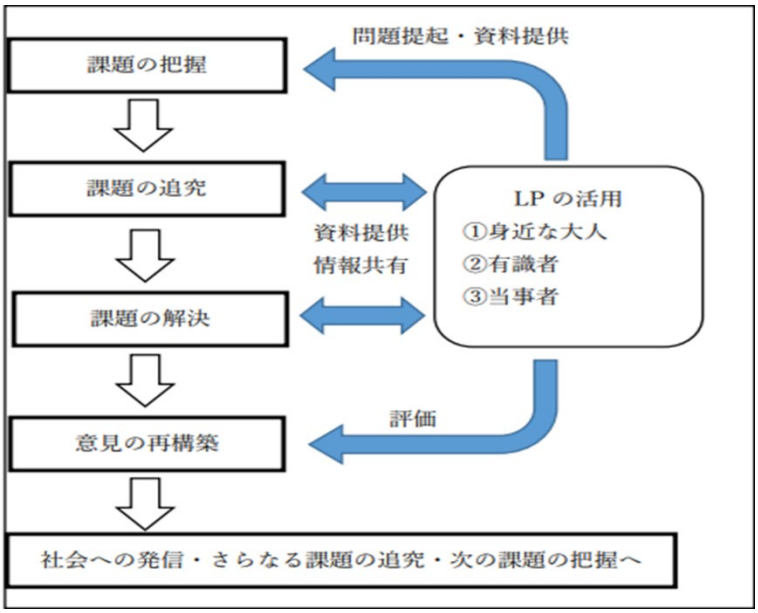
生徒を取り巻く現代社会において、規模や置かれている立場、関係性によって「社会問題」と定義付けられる事象は数多く存在する。また、「社会問題」をより良く解決するために考えるべき課題も多く存在する。つまり、何が問題であって、何が課題なのかを的確に捉えながら、考えることこそがそれぞれの最適解や納得解につながるのではないかと考える。本支部では、これまで ①単元の内容と関連があること ②議論の余地や必要性があること ③本支部で生活する生徒にとって考える価値があることを基準に「社会問題」や解決のために考えるべき課題を題材にして、パフォーマンス課題を設定してきた。さらに、これまでの研究実践の成果と課題を踏まえ、より目標に迫るために、新たな基準として ④切実感があること、 ⑤生徒が生活する地区で起こっていることの２点を加えてパフォーマンス課題を設定することにした。「切実感がある」ということは、誰かが、何かしらの社会的事象によって、社会生活が困難な状況に陥る可能性があることや、すでに何らかの被害や圧迫を受けているということと定義づける。また、生徒が生活する地区で起こっていることを題材にすることで、生徒が自分たちで解決しなければならないという使命から意欲を掻き立てられると考えられる。そうすることによって、社会に開かれた中学校社会科の学びにつながると考えた。

・ラーニング・パートナー（LP）について

これまでは ①身近な大人（保護者・教員など） ②専門性（研究者・民間企業社員・専門機関職員など）をラーニングパートナー（LP）とした授業実践を行ってきた。LP とは「よりよい社会を築いていくためにという共通の目的をもち、互いに学び合い議論することができる他者」と定義づけている。これまでの実践では、生徒の学習活動に有意義な情報を提供してもらうことで生徒の考えがより深まったり、LP による評価で新たな課題の発見につながったりするなどの有効性が明らかになった。これらに本支部では ③「当事者性（役所職員・組織、団体職員・専門機関職員）」を加えて研究実践を図った。「当事者性」でしか知り得ることができない現状や課題、解決に向けたより強い思いなどを生徒と共有することで、生徒が解決の必要性や解決しなければならない切実感をもちながら学習に取り組めると考えた。

(2)単元構想図について

単元構造図は、課題の把握から社会への発信までの授業展開を示したものである。この学習展開の中で、より生徒が解決の必要性や解決しなければならない切実感をもち、学習に取り組める手立てとして、LP を様々な場面で活用してきた。学習を進める中で、課題追究や課題解決が一緒になったり、課題の把握に戻ったりすることもあった。より生徒に切実感のある考えを持たせたり、当事者意識で考えさせたりするために、課題に対して切実感や困り感のある LP に協力を依頼した。実際の授業中の LP の役割は、資料提供や議論・協議、情報の共有をすることであり、授業後には LP からの評価をもらった。その評価は生徒にフィードバックし、その評価で新たな課題の発見につながったりするなどの有効性が明らかになった



4　研究課程

・第１回社会科研究部会（　　５月３１日　啓成中　）年間計画、研究主題の確認
・公民的分野授業実践　（　　７月　４日　山代中　）小林　秀憲　教諭（山代中）
・第２回社会科研究部会（　　７月３１日　啓成中　）授業実践の持ち寄り、発表原稿の作成
・第３回社会科研究部会（　　８月　７日　啓成中　）発表原稿の作成・推敲
・第４回社会科研究部会（　　８月２３日　啓成中　）プレ発表、発表原稿の推敲
・第５回社会科研究部会（　１０月２４日　啓成中　）プレ発表会（発表、質疑応答）発表原稿の推敲
・第５５回九州中学校社会科教育研究大会　宮崎大会　（　１１月１７日　田雑拓教諭　発表　）
・第６回社会科研究部会（　　１月２４日　啓成中　）振り返り、次年度の確認

5　研究の成果・課題

(1)成果

・当事者やその問題を解決する人とともに学びを深め、生徒の主体性や意欲は高まり、LP との学習前と学習後では生徒が考える意見にも変容が見られ、中学校社会科の求める資質・能力を育成に繋がった。
・当事者性を持たせるために「切実感」のある学習課題の設定や学習手段を活用したことで、生徒が、一市民として、社会問題について考えを深め対話をすることができた。

(2)課題

・今後の展望として、生徒の意見を広く社会に発信することができる授業を実践する。そのために、地域の広報誌や新聞に生徒の意見を投稿したり、市議会や町議会の議員との意見交流したりなどを考えていきたい。

《　文責　渕上　徳郎（啓成中）　》

第３学年社会科（公民的分野）学習指導案

場　所　３年１組教室
指導者　小 林　秀 憲

１　単元名　　～現代社会の特色と私たち「グローバル化」～

２　単元について

(1)　単元観

中学校学習指導要領社会科編には「現代社会の見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す」とある。グローバル化とは、交通網や情報通信網の発達により、経済や物流、情報通信など様々な面で国家間の結びつきが密接になっていることである。近年では、就労や留学を目的として日本に居住する外国人は増加の傾向にある。しかし、外国人居住者は慣れない日本での生活や自国との文化の違いに困惑していることも考えられる。そこで、我が国の外国人居住者の生活を支援し、その文化を尊重した上で交流を図り、お互いに住みやすい社会を構築し、共生を目指そうとすることは社会の一形成者として大切なことである。

(2)　生徒観

本学級の生徒は、社会科の学習に意欲的な生徒が多く、社会的事象から課題をとらえ、対話による課題解決に意欲的に取り組む。また、令和４年度佐賀県学習状況調査の結果においては平均正答率が県正答率を上回り、特に、思考・判断・表現の観点の平均正答率は県正答率を大きく上回った。また、本単元の学習に先立ち行った実態調査では、地域社会で外国人居住者が増加していることを認知しているものの、実際に外国人居住者との交流経験がある者や交流に意欲をもっている者は少ないことがうかがえた。

(3)　指導観

授業では、ワークシートで予習して対話による課題解決学習に取り組んでいる。本単元の学習では、まず、グローバル化について地理的分野の既習内容の復習と今後の進展について予習をして県内在住の外国人居住者に対するアンケート結果を参考にして、生活の実態や課題を読み取らせ、外国人居住者が生活しやすいまちにするための取り組みを考えさせる。次に、市内在住の外国人居住者をラーニングパートナー（以下、LP）として招き、実際の生活の様子を聞き、生徒自身が考えた取り組みを提案し、意見交流をさせる。このような学習を通して、一市民として外国人居住者の生を取り巻く課題や改善点について、多面的・多角的に考えさせたい。

３　単元の目標

(1)　諸資料やLPの話から外国人居住者の現状や課題をとらえ、理解を深める。
(2)　外国人居住者が生活しやすい地域社会について多面的・多角的に考察し、その内容を表現する力を養う。
(3)　外国人居住者の現状や課題を主体的に捉え、共生に向けて解決しようとする態度を養う。

４　評価規準

(1)　諸資料やLPの話から外国人居住者の現状や課題をとらえ、理解を深めている。
(2)　外国人居住者が生活しやすい地域社会について多面的・多角的に考察し、その内容を表現している。
(3)　外国人居住者の生活の実態や課題を主体的に捉え、共生に向けて解決しようとしている。

５　指導と評価の計画（全３時間）

(1)　外国人居住者が生活しやすいまちづくり　　１時間
(2)　外国人居住者から話を聞こう　　１時間
(3)　外国人居住者が生活しやすいまちづくりの提案　　１時間

６　本時の学習（本時１／３）

(1)　目標

ア　外国人居住者の現状や課題について資料から情報を読み取り、理解を深めている。

イ　外国人居住者が生活しやすいまちづくりについて多面的・多角的に考察、構想し、表現している。

(2)　展開

過程	学　習　活　動	教師の働きかけ（○）・評価（◆）・ＩＣＴ(☆)
導入	1　我が国と諸外国の結びつきがどのようなところで見られるか考える。	○　地理的分野で学習した内容を復習させながら、国家間の結びつきを確認する。
見通す	2　めあてを確認し、学習の見通しを立てる。 【めあて】　外国人居住者の現状と課題について理解し、外国人居住者が生活しやすいまちにするための取り組みを考えよう。	
考える	3　佐賀県や伊万里市の外国人居住者の人数や居住の理由を知る。	☆　電子黒板に県内在住の外国人居住者数や目的を提示し、その内容を読み取らせる。
	4　グループで討論をする。 (1)　外国人居住者が生活する上で悩んでいることや困っていることについて、資料を参考にして、分かったことを発言する。	○　「話し合いマニュアル」を活用し、進行させる。
	(2)　討論の視点に基づき、今後考えられる地域社会への影響を考える。	○　資料以外にも生徒の体験や外国人居住者の立場で考えさせ、その意見を発表させる。 【討論の視点】 ・日常生活　・文化の違い　・社会福祉 ・医療　・教育　・地域との交流
考え合う	5　他グループの発表を聞き、共有する。	☆　討論の内容はジャムボードに整理し、発表時に電子黒板に掲示し、活用させる。
振り返る	6　自分の考えを記述する。 ・話し合ったことをもとに外国人居住者が生活しやすいまちにするための取り組みを考え、条件に当てはまるように記述する。 【本時のまとめ】（例） 私は外国人居住者が生活しやすいまちにするために、外国の言葉が書かれた看板や案内板の設置、スマホの翻訳アプリを活用した支援などが必要だと思います。それは生活するにも日本語がわからない人が多いだろうし、生活するのに不安になると思うからです。	○　次の条件で、記述させる。 ①　「支援」もしくは「交流」いう語句を使い記述する。 ②　討論で出た意見をもとにして記述する。 ◆外国人居住者の現状と課題について理解したことを踏まえ、外国人居住者が生活しやすいまちにするための取り組みを記述している。 （ワークシート）